幼兒保育の方針に就て

（京阪神聯合保育會に於ける講演の筆記）

京都帝國大學教授文學博士　小西重直

本日は京阪神三都市の幼稚園に關する教育の御研究の會であります、私に何か話をせよと云ふことでありましたのですが、實は幼稚園のことに關しましては、誠に濟まないのでありまするけれども、十分細かな、又新しい研究はいたして居らないのであります、其の細かな細目に亘つてのことは、尙ほ皆さんから事實を伺つて、もう少し注意をいたして見たいと考へて居るのであります、本日は實際上の細かなことに就きましては皆樣の御意見を承り、私の方では大體幼稚園の保育に關しては其の大いなる方針としては、斯う云ふものではあるまいかと云ふとの問題を提出しまして、尙ほ是から皆さんの十分演說もあることでありますから、さう云ふ機會に於きまして皆さんの御意見を伺つて見たいと、斯う云ふ考であります、で私の話しすることは決まつたことでなくして、一ツの問題としてお話をして見る、斯う云ふ考であるのであります。

子供の小さい、卽ち小學校にまだ這入らない幼兒の時代に於きましての取扱方に就ては、例へば幼兒預り所の如きものもあります、又幼稚園があり、家庭教育があると云ふやうな工合に、色々機關があるのでありまするが、本日は其の家庭教育及び幼兒預り所と云ふことは除けて、所謂幼稚園と云ふ問題に就てのみお話をするのであります、此の幼稚園の保育の大いなる所の方針と云ふものは、既に日本に於ては文部省に於て法令の上に決まつてるのであります、私の本日申し上げること

は、其の法令の上に決まつて居ることを改良するとか、若くは根本から變更する、さう云ふ大問題でなくして、其の法令で決まつて居る所の精神に從つて我々は何う取扱ふかと云ふ、其の方針である、即ち此の法令に於ける方針としましては、幼稚園と云ふものは家庭教育の補ひをする場所である、幼稚園と云ふものは家庭教育の補ひであると、斯う云ふ風になつて居るのであります、是れは小學校令の第何條かに幼稚園に關する大方針が揚げてありますが、其所に出て居る其の意味に於て此の幼稚園と云ふものゝ保育は家庭教育を補ふものである、斯う云ふ所謂日本に於ける今日の大精神に基いて、其大精神を實行する場合に我々は何う云ふやうな方針を執るか、それに關して自分の考をお話して見やうと思ふのであります、無論一面には此の法令の上に現はれて居りませぬけれども、事實上幼稚園を經た者が、小學校に行く——其の小學校との關係に就ては事實上の問題として隨分大きな問題があらうと思ひますが、即ち此の幼兒の生活は遊戯である、小學校の生活は仕事である、其の遊戯生活から仕事の生活に移る、其の經過の工合——幼稚園としては自分は段々申し上げますが、矢張り遊戯的生活、遊戯的保育と云ふものが本體でありますが、小學校との關係から見れば、幼稚園の中で子供の大きな者に對しては遊戯と云ふものを本體として、それから仕事に移つて行く、其所に幾らかの暗示を與へるのである、斯う考へて居る所謂家庭と云ふものから小學校に來る子供は、殆ど純粹なる遊戯的生活から直ちに仕事的の生活に移る然るに幼稚園を出て來た子供は遊戯的生活ではありますけれども、其中に少し仕事の暗示を受けて來るのである、さう云ふ差違があらうと思ふ、此の問題は餘り深く論究する時間がありませぬから、他日に讓ることに致します、本日は大體に於きましては、本省の方針に基きまして、所謂家庭教育を補ふと云ふ意味の幼

稚園の保育に就て主にしてお話をして見やうと思ふのであります。

それで此の幼稚園の保育に關しましては、從來色々な主義が現はれて居る、從つて其の主義に立つて色々な實行が伴はれて居るのであります、日本でも外國でも、從來色々の變遷をして來て居ると思ふのでありまするが、其の變遷の一ッをお話をして見ますると云ふと、第一の種類は幼稚園の保育と云ふものが獨逸の學者ヘルバルトの考に從つて動いて居るのである、即ち幼兒保育と云ふものは、矢張り子供の知識の方面に餘程注意しなければならぬとの主義である、例へば子供に孝行と云ふ觀念を與へなければならぬとすれば、或は恩物に於ても、手技に於ても、或は遊戯に於ても、色々な方法に於て孝行に關することを敎へる、例へば大變に孝行であつた人の話をする、其の孝行な人の持つて居た物を作るとか或は孝行な人の話を遊戯に作るとか云ふやうなことをして、孝行と云ふ概念を養ふ爲めに、各方面から色々な事を敎ふるのである、斯の如き幼稚園保育法が大分一時あつたのであります、けれども是れはヘルバルト風の敎育と云ふものが壞れて居る如く、矢張り幼稚園に於ける保育の此の主義も今日は壞れて居るのであります、即ち御承知の如くヘルバルトは人間の心と云ふものは觀念である、其の智識上の觀念と云ふものから情も起つて來れば、意志も起つて來る、心の本體を觀念智識に置いて居るのである、其說は今日は壞れて居る、又ヘルバルトの考はさう云ふ考であつて、幼稚園を作つたフレーベルの考とは全然違つて居る、從つてフレーベルの考を立てんが爲めにも亦ヘバルトの方から來て居る主義は壞れて居る、幼稚園の方では、即ち此のフレーベルの方では皆さんの方が私よりもより以上御精通であるであらうと思ひまするが、子供心と云ふものは物を創造する力である、斯う考へて居る、ヘルバルトは人間の心、又子供の心は無

論でありますが、智識概念が本體であつて靜的である、幼稚園を作つたフレーベルの考は、人間の心、子供の心と云ふものは物を創造する力であつて、動的である、物を生産する力である、斯う考へて居る、勿論其のものは物質ばかりでなく、廣い意味に於ける物を作り出す力である、それはフレーベルは此の人間と云ふものは神の恰度うつしであつて、神と云ふものが宇宙萬物を創造したものである、人間は神のうつしである、故に人間も物を創造する力を持つて居るのだと云ふ考であるのでありまして、其力を發達させるのに幼稚園と云ふものは子供の實際の行ひ、實際の遊戯に依つて發達せしむるのである、彼の恩物の基本形の如きは卽ちフレーベルの其考を現はして居るのである、フレーベルの恩物と云ふものは、物を恩物のやうな形に變へて、色々な形を造つた、それで以て建設的に子供が物を作るところの働きを稽古させるのである。其の意味から恩物が出來て居る、又式も其の通り、それからもう一ッ、フレーベルの考としては天地人統一の考、――神樣と、人間、自然界、皆うまい鹽梅に調和しなければならぬ、斯う云ふ考を持つて居つた、卽ち天地人の調和である、或はフレーベルを他の言葉で現はしますと、宗敎と云ふものと、それから創造の力と云ふもの、個人々々の節制力、此の三ッがうまく調和すれば其所に天國が生れて來る、それが理想の境遇であると云うて居る、さう云ふ風の調和を經、段々發達して行くのが人間の立派な生活であると、斯う考へて居る、其邊の考が大分ヘルバルトの考と違つて居る。

そこでフレーベルはさう云ふ天地人の調和、或は人間社會や、自然界及個人々々の天賦の調和、斯う云ふ各方面の調和と云ふものから矢張り恩物も考へて居る、例へば圓い形の恩物がある、其の圓い格好の恩物は是れは運動が自由である、何方の方でもコロ〳〵轉げます、それから夫れに對し

て今度は立體の正方形のやう、是れはチャンと座ります、餘り動かない、角が澤山あつて又平面の面もあるから座つて動かない、此圓いものと正方形のもの、其の兩方は互に反對と云ふものであるが、夫れを調和しなければならぬ、それを調和するのは所謂圓柱形の棒である、圓柱形の棒と云ふやつは兩方の端の底の面が圓く平面になつて居る、圓いけれども、此奴を斯う立てると云ふとチャンと座つて居る、動かない、其邊の所が正方形に類似して居る、然し此棒を横にして轉げると云ふ所は圓の性質に似て居る、圓柱形は卽ち調和の棒であると、斯う云ふ考であつたらしい、そこで此の恩物の基本形の球の圓いやつと、立體と圓柱と、此の三ッのものが集つて、お互ひが調和して、或は此の圓いやつを假りに天と見れば、角のやつは地である、圓柱形は人である、卽ち天地人の調和である、或は又之れを假りに圓いやつは人間の情の力である、或は角のはつは人間の意志の力である、又圓柱形のやつは生産の力である、こんなに分類しても宜からうと思ふ、さう云ふ風にフレーベルは餘程ヘルバルトは違つて、人間の力、人間の精神と云ふものを活かして考へて居る、動的進化的に考へて居る、斯の如き意味からして、ヘルバルトの考と云ふものは、幼稚園の方に於きまして一時或幼稚園等に於きましても、又或學者等に於ても、幼稚園の保育といふものは矢張り相當の概念、相當の智識を養ふものであると云ふ考であつたのが、今日ではそれが壞れてしまつて居るのである。

それからもう一ッは、此の幼稚園の保育の主義としましては、家庭的の仕事を主とする、或は之れを家事上の主義、或は家事的保育主義と云うても宜しい、此の主義は何う云ふ考から來たかと申しますると、人間の發達と云ふものは個人の發達と云ふものと、それから團體的人類全體の發達の狀態に似て居る所がある、例へば十二三歳の青年

前期時代に於ては隨分亂暴なものである、親の言ふことも聞かず、木登りしたり、勝手に何處かへ行つたり、色々な亂暴をする、喧嘩もする、此の青年時代に色々亂暴すると云ふことは、是れは太古人類全體に嘗てさう云ふ時代があつたのである、太古の或時代は人間全體に於て皆亂暴で、或は木登りするとか、游泳をするとか、野生的生活をして居つたのである、其の野生的の祖先の生活が遺つて、今日青年時代に現はれて居るのである、と云ふやうな譯で、此の子供の發達の狀態と、人類全體發達の狀態と、似て居る所があると云ふが、さう云ふ學說がある、さう云ふ學說からして子供と云ふものは、矢張り太古の原始的人類の發達に似て居る、其の人類の發達から考へて見ると、太古の人には例へば狩獵をする人も、又漁獵をする人もある、或は時代が進んで牧畜をするとか、農業をするとか、商業をするとか色々の事實がある、そこで子供の一番小さいやつは、太古の發達順序の獸を狩るとか、或は魚を獲るとか云ふ時代に相當して居るものである、そこで幼稚園あたりの子供には、獸を狩るとか、魚を獲るとか、或は物を煮るとか、或は洗濯をするとか、さう云ふことをさせるのが、是れが相當の順序であると云ふ考からして、幼稚園で例へば芋を掘らせるとか、或は芋を運んで來るとか、或は芋を鍋に入れて煮るとか、或は洗濯物をさせるとか、實物を取扱はせて、さうしてやつたと云ふやうなことも隨分米國あたりであつたのであります、今日でも幾らか殘つて居る、事實やつて居る學校もある、是れは幼稚園の保育と云ふものを、一種の實際生活に化するやうな弊害があらうと思ふ卽ち芋なら芋の實物を持つて來て、それを煮ることは、是れは實際のことである、お互ひの家庭に行つても能く分りますが、小さい子供と云ふものは、まださう云ふやうな人生の實際生活に觸れないものである、其時代に於て既に此の實際生活をやらせるといふものであ

る、けれども夫れを辯護して言ふには實際芋なら芋を煮るけれども、それは十分子供では可かぬから先生から手傳ふのである、又子供に煮らして置いても、それが十分煮えなくても宜いではないか、所謂結果は問はない、斯ういふ辯護がある、それは一應尤もではあるけれども、併しながら結果を問はない所の實際の仕事といふものは、是れは寧ろ惡い習慣を作るものであらうと私は思ふ、本當の芋でなしに、例へば土を持つて來て芋のやうなものを製造して、炊事の戯をなすは宜しい、けれども本當の芋を持つて來て、本當の醬油を使ひ、本當の火を使ひ、本當の鍋を使つて煮て、煮えなくても宜しいといふ習慣をつけるといふことは、寧ろ惡い習慣をつけるのであると私は思ふ、故に斯ういふ意味の家事主義、所謂家庭上の仕事の上から來た仕事の働きをさせるといふ其の考は、幼稚園に於ける保育主義として、子供の遊戯を沒却して、小さい子供に仕事を強ひ、小さい子供に實際の仕事を強ひるものであると、斯う思ふのである、從つて是れは幼稚園の保育主義ではない、モンテッソリーの如き多少此の樣な仕事を課して居る樣であるが夫れは考物である、たとへ子供は面白いと思ふても、以上の理由によりて考物である、矢張り子供は子供相當の生活、子供相當の保育をしなければならぬ、さういふ意味で大人が考へて——人類の發達は個人の發達と似て居るといふやうな議論を考へて來て、たゞ大人の理窟から子供に應用してさうして子供の遊戯生活を打壞してやるといふことは甚だ面白くないと思ふ、無論子供の方では、或場合には隨分其事に興味を持つものである、子供の方ではそれを矢張り一ッの遊戯と考へて居るかも知れぬ、けれどもさういふ實物を實際使つて、其の結果が可かぬといふやうなことは、惡い習慣を作るものであると思ふ、斯ういふ意味からして家事主義の保育主義と云ふことは、用ゐない方が宜からうと思うて居る、亞米利加邊

には多少さう云ふことか遺つて居る、けれども米國も今では段々さう云ふ考は廢れて居る。

それからもう一ッの主義は、自由遊戯に關する主義である、此の自由遊戯に關する主義は、是れは最近に於ける兒童心理學の研究の方から促されて來たものであらうと思ふ、卽ち兒童心理學の方では、子供の活動力を重んずる、是れは敎育の方でも勿論重んずるのでありますが、成るべく子供は、子供らしくやるのが宜い、丁度今の家事主義とは正反對の考であつて、子供に子供らしくない仕事を强ひては可けない、子供は自由主義でやるのが本當である、其の子供本然の狀態から見て、兒童心理の本當の狀態から見て、自由遊戯主義を主張して來て居る、卽ち此主義に依る幼稚園の保育法は何うするかと云ふと例へば恩物でも手技でも、其他色々な玩具を持つて來て、子供が勝手に夫れを持つて遊んで居る、又一定の時間などを更に設けず、全く個人的の興味に任して置く、總てのことを皆子供の個人的興味に委して、たゞ保姆は夫れを見て、惡い場合には幾らか指導してやると云ふだけで、總て子供は自分の個人性の趨く所に依つて何かやつて居ると云ふのである、それが所謂自由遊戯主義である、自分勝手にやつて居る、此の自由遊戯主義は、實は一面に餘程家庭の生活に近い、卽ち家庭に於ける子供は、大體普通の家庭に於ては先づ子供は自由主義の生活である、父も居り母も居り、其他色々な人が居るけれども、大體先づ放つて置くのである、それで子供は色々な事をして遊んで居る、惡ければ親に叱られる、此點に於て自由遊戯主義は子供の家庭生活に似て居る、大變緣が近い、さう云ふ方面からして此の主義を見れば、餘程面白い考であると思ふ、それから又お互ひ幼稚園の保育に於ては子供の個性を重んじなければならぬ、是れは何所の學校でも同じことでありまするが、幼稚園でも同じことで、子供の個人性は皆違つて居りますから、それは始

終見て置かなければならぬ、それを觀て、それに從つて敎育して行く、是れは其の個人性を觀るにも大變都合が好い、子供が自由に勝手に遊んで居るのだから、敎師が觀察するのに極く都合が宜い、それを十分觀察して、それから子供の性質に從つて色々な注意をしてやる、此の子供の個人性に重きを置いて、個人々々自然に暢びり伸ばしてやると云ふ、是れは面白い主義であらうと思ふ、所が又他方から考へて見ますると云ふと、幼稚園の保育と云ふものは純然たる家庭敎育ではない、家庭敎育を補ふ敎育である、家庭敎育を助げる敎育である、して見れば純然たる家庭生活のやうなバラバラな自由遊戯だけでは、幼稚園を設ける所の意味は無くなつてしまふ、唯親と云ふものが自分の子供を構はず、たゞ親が樂する爲めに、國家なり市が幼稚園を置いたのではない、是れが婦人の墮落に流される點である、苟くも幼稚園を設けて行き居る以上は、其の家庭敎育を助けると云ふことが必要である、さう云ふ意味から見れば、たゞ子供は子供なりに、勝手に遊ばして置くと云ふだけでは可かないと思ふ、卽ち其所に家庭の母の手が十分屆かぬ、其の母の手の屆かぬ所を我々が指導して行く、其の指導の意味が、自由遊戯の方では甚だ不完全ではないかと思ふのである、又子供の勝手にやつて居りまする時には、子供の努力の精神などの養成は六かしい又一方には人間社會と云ふものは一ッの團體生活である、其の團體生活の、麗げながら基礎を作ると云ふには、矢張り相當の社會的遊戯も必要である、團體的遊戯も必要である、然るに自由遊戯の主義では個人々々バラ〳〵にやつて行く、さう云ふ意味に於て此の所謂自由遊戯生活——自由遊戯主義と云ふものは決して夫れが全然善いと云ふ譯には行かないであらうと思ふ、從つて私は矢張り幼稚園の保育と云ふものは、純然たる自由遊戯主義では可けないと斯う考へて居る、殊にフレーベルなどの考を見まし

ても、餘程社會に關する考が強く働いて居る、フレーベルの考では、寧ろ個人遊戯よりも社會的遊戯が多かつた、其當時は獨逸邊の國家的狀態と云ふものは、共同的精神を促して居つた、ナポレオン戰爭に獨逸が敗けて、獨逸が復興しやうと云ふ時代であつたから、團體的精神、國家的精神を鼓吹した時、其の時代に於てフレーベルは矢張り一種の團體生活、社會的生活の必要を幼稚園教育に於て實行した譯である、然るに自由遊戯主義と云ふものは、其の方が殆ど無く、個人的バラ〳〵になつて居ると云ふ傾向を持つて居る、極端である、從つてフレーベルの幼稚園を作つた趣旨にも餘程遠ざがつて居るのである卽ちさう云ふ意味から私は各方面から見まして自由遊戯主義と云ふものを幼稚園の保育主義とすることは出來ないと考へて居る。

そこで大體今日までさう云ふ三の主なる主義が現はれて來て居るのでありますが、然らば我々は何う云ふ考、何う云ふ主義の下に立つて、大體案を立つべきであるかと云ふのがお互ひの實際問題であると思ふ、又私の研究問題であるのである、自分の考では、幼稚園の所謂保育の精神を決めるには各方面から見なければならぬ、第一幼稚園と云ふものは家庭の教育を補ふ一ッの機關である、斯うする以上は矢張り是れは大いなる意味に於て國家教育の、或は國民全體の教育の上に密接なる關係を持つて居るものである、家庭教育が完全なれば、學校教育も非常に都合が宜い、家庭教育と云ふものは、國家全般の教育の基礎になると云ふ大なる役目を持つて居る、斯うすれば幼稚園の保育と云ふものは、一面國家は何う云ふ要求をするかと云ふ國家の要求に我々は眼を注がなければならぬ、そこで今日の國家の要求には色々あるでありませうが、教育上に於ける國家の要求としての大なる一ッは、自分の考では何うしても此の國民と云ふものが自分の方で一ッ物を作り出す、精神

の方面に於ては工夫を積み、今日より以上に明日は進んで行く、日に日に新しくなつて行く、今日の吾以上の吾を段々作つて行く、物質の上に於ても段々工夫を積み、自分で新しいものを作つて行くと云ふやうに、精神上の方面に於ても、又物質上の方面に於ても、物を生産する、創造する、物を作ると、さう云ふやうな力を要求することが餘程痛切であると思ふ、それからもう一歩進んで、自分の作つたもの、又人の作つたもの——精神上、物質上の兩方面に於て、自分の作つたもの、人の作つたもの、それを保護し、建設し、仕上げて行く、或は完成する、たゞ物を作るばかりでなく、段々保護を加へ、同情を以てそれを完結する、斯う云ふ力を要することが切であると思ふ、獨逸の如き色々なことが發明發見され、其他學術の研究であつても、隨分昔は他の國の模倣をして居る、幼稚園の如きは——フレーベルは獨逸人でありまするけれども、其の幼稚園を作つたフレーベルはペスタロッチの所へ行つて習つて居る、尤も考は違つて居るけれども、それにより刺戟を受けて居るのである、ペスタロッチの方では直觀主義を主張した、其の直觀主義と云ふものは例へば物を敎へるのに、其物の名とか、其物の格好とか、其の物の數とか、さう云ふ名や、數や形、之れを敎へなければならぬと主張して居る、フレーベルはさう云ふ考に基いて、まだ夫れだけでは不十分であると云ふので、子供には名や、數や、格好と云ふやうなものでなしに、子供の實際の活動、子供の實際の働きを基にする、即ち遊戯とか、恩物とか、或は手技とか、是れは皆子供の働きである、ペスタロッチの形や數や名や、此の三ッに對してフレーベルは恩物、手技、遊戯の三ッの活動を得たのである、さう云ふ風にペスタロッチの考を發達させて居る、工夫して發達させたに過ぎない、獨逸小學校の敎育にも其通り、ペスタロッチの非常なる影響を受けて居る、其他大學の如きは、之れ又

佛蘭西の大學の模倣であつた、昔は佛蘭西の巴里大學と云ふものは歐羅巴の大學の中心であつて、獨逸では佛蘭西の巴里大學と云ふものを皆眞似をして作つた、それを段々工夫を凝して今日のやうになつた、斯う云ふ風に建設して來て居ると思ふ、無論只今は各種の方面の要求がありまするが、殊に今回の時局等から見まして、今後國民教育に於ては餘程自分で物を作る、精神及び物質の兩方面に作る、さうして又他人及び自分の作つたものを建設して行つて、完成して行くと云ふ精神を作ることが餘程大切であらうと思ふのである、さう云ふやうな國家の要求が餘程切であらうと實は思つて居りまするが、其の要求と云ふものに幼稚園はどう答へて行くか、是れが一の問題である、それからもう一ッは幼稚園も矢張り一の教育活動の中にある所の組織の一でありますからして、一般の教育思想に對する所の關係を持つのである、今日の一般の教育界の思想と云ふものは、矢張り此の國家が要求する如く一種の斷えざる努力とでも云ひますか、斷えざる努力の精神を要求して居る、細かく申上げますれば、矢張り精神及び物質の方面に於いて何か新しい物を作つて行く、沈滯しない、而もそれを建設して行くといふことを恰度日本の國家が要求する如く、教育界に於ても矢張り建設しつゝあるのであります、さう云ふ意味に於て國家の要求も亦教育上の一般の思想の要求も、共にお互ひに物を創造し、それを建設すると云ふ人格の力を餘程要求して居る。

夫れからして幼稚園を作つたフレーベル夫れ自身の考、要求が一面あると思ふ、是れは幼稚園の立場として見て、設立者は何う云ふ考か、是れは先刻來申し上げる通り、フレーベルは人間の心と云ふものは、物を創造する所の力である、斯う考へて居る、さう云ふ考でありますからして、我々が今日考へて居る如く、國家の要求及教育一般の思想と餘程近寄つた事情がある、斯う云ふ風に色

々な方面から我々が幼稚園の保育に對しては關係があると思ひますが、國家の方面に於ても物を作り建設する要求がある、又一方敎育思想から要求することもさう云ふ要求をして居る、斯ういふ各方面の要求があつても、若し人間の方に於て、人間の性質と云ふものが本來それに適せぬものであると云ふことであれば、どんな要求を受けてもそれは實行の出來ないことである。併しながら、人間の本性、人間の性質を考へて見ると云ふと、矢張り人間の性質は斯う云ふ要求を受入れ答へて、實行するだけの立派な力を持つて居る、斯う考へる、近頃の心理學も段々發達して來て居りますが、動物の方では、例へば犬なんぞが自分の仕へて居る主人、其の主人と云ふものが家に居らないと云ふ場合には、其の主人を思出すといふことがどうもあるやうである、詰り現在自分の前に物がないのだけれども、それを自分の前に其物があるやうに考へる、是れは一種の想像の働きである、さう云ふ想像の働きが犬には有りさうである、けれども想像の働きのモット進歩した創造的の想像、卽ち色々な材料を集めて、統一して新らしき形を作り、それを段々と發達せしむるやうに仕組み、さうして一の新しい物を作る、卽ち創造的の想像ですナ、さう云ふものは動物にどうも無ささうである、例へば鳥が巢を造る、是れは色々な材料を集めて、今までにない形を立派に造つて行く、けれども此の巢と云ふやつは、數千年前の巢も今日の巢も異りはない、又將來も餘り變りはない、卽ち鳥は立派な巢を造るけれども、それは發達しないのである、從つてそれは發達する所の意味の生產的想像力とは云はれない、大體彼等動物といふものは、所謂本能以上に發達することは出來ない、本能に止まつて居る、幾らか發達はするけれども、大體其所に止まつて居る、人間に於きましては色々なものを集め、新しい物を作つて、それを段々發達させて行くと云ふ力がある、鳥の歌は實に立

派である、鳥は歌つてピイ〳〵言ふけれども、夫れ以上鳥として發達しない、けれども人間は鳥の歌を聽いて、それに時の關係を加へて立派な音樂を作つて行く、其の音樂も段々發達するのである、又鳥の巣を見ると誠に立派である、けれども夫れ以上人は工夫を凝し、それ以上の物を作るのである、さう云ふ風に人間と云ふものは創造的、生產的想像力に依つて段々其事を發達させて行くのである、或は動物に於きましても、色を好む動物もあれば又佛國のリボーの說いて居る如く、輝いたものを好む動物もある、是れは好み樂しんで居るけれども之れを集めて發達的のものは作らない、それは人間は物を集めて立派な繪も描けば、或は立派な建築もする、裝飾もする、さう云ふ風に人間の方では發達して來る、勿論我々は物を作ると云ふ場合に於きましては、其の物を作る必要に迫られると云ふことゝそれから所謂必要を感ずることゝ、一方には精神の方では卽ち生產的想像力、是れが働いて居る、動物の方では、或場合には其物を作る必要を感ずるかも知れぬ、けれども夫れを作る性質の働き、卽ち生產的想像力がない、之れが人間には其の要求を感じ、同時に又其物を作るだけの力を持つて居る、創造的想像力を持つて居るのである、是れだけ人間と動物とは違つて居る、そこで此の理想と云ふものは、人間に固有なものであつて、動物にはない、斯ういふ工合に生產的想像力と云ふものは、人間に固有なものであつて、動物には先づない、あつても誠に少ないものであると、斯う云はれるだらうと思ふ、して見ると、人間に固有なものであれば、人間に於て發達しなければならぬ、斯う云ふ問題になる、けれども人間の固有であるが、併しながら幼稚園時代の小さい子供にさう云ふ精神は何うであるか、國家の方面から見、又一般敎育思想から見、フレーベルの考から見て、夫等生產的方面、及び建設的方面の要求が起るのである、人間の本能精神から見

て、皆斯う云ふ性質を持つて居る、然らば是等の幼稚園時代の子供に於ては何うするか、若し幼稚園時代の子供が持つて居れば、それは誠に仕合せである、若し不幸にしてさう云ふ要求を受けても、其本質が缺けて居ては實行は出來ない譯である、然るに幸にも、我々がお互ひやつて居る幼稚園に於きましては、所謂其生産的想像力といふものを子供が大部分持つて居る、幼稚園時代の子供の生活は、殆どもう創造的想像力の生活であると、斯う云ふても宜いくらゐである、此創造的想像力といふものは、矢張り段々發達の順序があるのでありますが、手近い話が、例へば此の小さい子供に兄弟が幾らかあると假定しますと、兄弟喧嘩を能くするものである、其頃に丁度此創造的想像力も發達して來る、未だ兄弟喧嘩の出來ない時代、即ち兄なら兄、姉なら姉から小さい子供に何かされて、全く竦んで居つて泣き出した、自分がそれを幾ら防がうとしても、手を出すと云ふことは六ケしい、攻擊的に其の相手の方に向つて擊つてやらうと抵抗する、力もない時代がある、他から色々なことをされると直ぐに泣き出す、此時代には未だ創造的想像力が發達して居らないのである、所が三歳ぐらゐの子供はさうであるが、それが段々大きくなりまして、兄からやられる、或は他の者からやられた場合に、防禦的ばかりでなくして、攻擊的にやり出す、そこで初めて喧嘩が起る、防禦的の時には喧嘩にはならない、所謂本當に兄弟喧嘩の起つた場合に、初めて創造的生産的の想像力が發達して居ると云ふ時代になつて居る、即ち生産的想像力は何時頃發達するかと云ふと、先づ兄弟喧嘩をする、防禦的ばかりでなく進擊的に抵抗して行く慾も出、意志も出來、又體力も出て來ると云ふ、さういふ時代に精神的能力が發達して居るのであると、斯う云ふことになる、又他の方面から見ると、例へば人形を以て能く遊んで居るといふ時代、或は物を捉へて來て、其物を色々な意味に作ると

いふ時代は、皆生産的創造的想像力の働きである、或は棒片といふものを以て劍と思ふたり、或は擊劍の竹刀に使つたり棒一本を色々なものに考へてやつて居る、或は石塊を持つて來て金に考へて見たり、或は小石をお菓子に考へて見たり、喰ふ物に考へて見たり、實際小石以上のものを作る、即ち實際の物以上の物を創造し生産して來るのである、棒は實際の形であるけれども、棒以上に劍とか刀とか云ふものを其所に生産して來る、又小石は小石であるけれども、子供は小石以上に其所にお菓子とか、喰ふ物とか云ふ者の意味を附け加へて來る、生産して來る、是れ皆生産的想像力である、さう云ふ意味に於て、是れは能く觀察すると分るのでありまするが、先づ幼稚園に這入る滿三歳頃から大體さう云ふ精神が段々旺盛になつて來る時代であらうと思ふ、即ち幼稚園の時代と云ふものは、殆ど其の子供の生産的想像力の時代である、更に言を換へて申し上げますれば、子供は遊戯的の生活である、其の遊戯的生活に於て創造的生産的想像力が完全に活動して居るのであると、斯う云ふ時代である、無論子供は其時代に於きましても遊戯ばかりでなく、幾らか實際と云ふ考がある、例へば飯を喰ふと云ふ場合、或はお菓子を喰ふ場合、果物を喰ふ場合には、實際子供の腹の内部の生活、腹が減るとか、咽喉が渴くとか云ふ實際の要求の生活から物を喰ふとか飲むとか、さう云ふ場合は子供の實際的生活である、實際の生活である、それは遊戯でない、だから子供が御飯を喰べる場合、お菓子を喰べる場合、其の喰べる瞬間は遊戯でない、けれどもさう云ふやうな御飯を喰べる、お菓子を喰べると云ふ實際の生活の中にでさへも、遊戯をしたがるものである、お互ひ家庭を持つて居ると分りますが子供が二三人で飯を喰つて居ると、お互ひに飯を喰ひながら、お父さんやお母さんに叱られながら、時にふざけ戯れて居ることがある、さう云ふやうな譯で、實際生活に於

ても遊戯をしたがると云ふ傾向を持つて居る、其のくらゐ子供の生活と云ふものは先づ遊戯の生活である、而も其中に創造的生産的想像力が旺盛に發達すると云ふ時代である、斯う云ふ風に考へて宜からうと考へて居るのである。

そこでさう云ふ意味から申しまするとと云ふと、即ち國家が要求し、一般の教育思想が要求し、又フレーベル即ち幼稚園を作つた人が要求して居る、而も一般の人間の性質に於て固有である、又幼稚園時代の子供にそれが旺盛である、斯うして見まするとと云ふと、幼稚園の保育主義と云ふものは、創造的生産的遊戯的生活である、是れは無論建設の意味も含んで居る意味に云つて居りますが、先づ生産が主ですから生産的遊戯的生活、斯う云ふやうな意味に解釋して、之れを考へて見たいと私は考へて居るのである、即ちヘルバルトの説に影響を受けた概念主義でなく智識主義でなし又家事主義でもなし、自由遊戯主義でもなし、創造的生産的遊戯主義である、其意味から見まして幼稚園の保育と云ふものは、兎も角簡單に云へば先づ遊戯生活である、其の遊戯に於て生産なり建設がある、斯う考へる、さうすれば其の生活と云ふものを、假りに今茲にお話の便宜に從つて個人的の働きと團體的の働きに分けて見る、個人的の働きに於ては、例へば先刻の自由遊興主義のやうな工合に、一面に於ては子供の興味を本體とする即ち恩物でも、手技でも、其の他の遊戯でも、子供の思ふ勝手なことをやらせる、此方から餘り教へない、全く個人的に放任して置く、さうして夫れを見て居つて、極く惡いとか、或は間違つて居るとか云ふ時には注意するけれども、餘り干渉せずに、大體子供をして、個性の興味に從つて思ひ〳〵遊んで居ると云ふ風に任して置くと云ふのが個人的活動であると思ふ、其の個人的活動から、先刻自由遊戯の場合にお話し申したやうな工合に、一面個人性の發達に依ることであり、又殊に家庭から幼

稚園に直ぐ來た子供、殊にそれが年の小さいと云ふ場合にあつては、初めから團體的遊戯をするのは六ケしいであらうと思ふ、家庭生活に於ては、子供は個人的遊戯をやつて居る、兄弟がありますれば兄弟、二三人と云ふことであるけれども、甚だ團體の意味が少ない、從つて家庭から直ぐ來た者に向つて團體を作るならば、極く小さい團體を作り、二人三人の團體を作る、是れが家庭から來た者に對する保育上の順序ではないかと思ふ、初めての子供が大なる團體を作つた場合には、子供の家庭から來た時と順序が違つて居りはせぬかと思ふ、是れは或子供の經驗でありまするが或家庭で男の子を持つて居る、幼稚園に送つた、所がそれが幼稚園をどうも餘り好まない、其原因を調べて見ますると云ふと、其子供は家庭に於ては隣りの子供や何かと一緒にやつて居つて、極く活潑に駈足をする場合には、思ひ切つて駈足をすると云ふ工合に、一生懸命自分勝手の活動を盛んにやつて居つた、所が幼稚園に這入ると團體的に皆繋がれて、自分自身で活動が出來ない、遊戯なども皆團體的に多くやつて、さうして人と一緒にやる譯で、自分自身で活潑な活動が窮屈で出來ない、さう云ふ風に幼稚園が詰らない、面白くないと、斯う云ふやうな爲めに幼稚園を嫌つた、と云ふ話を聞いて居る、是れが若しも事實であるならば、家庭から來た直ぐの子供に、初めから社會的、團體的の遊戯をやらすことは、それは順序が違つて居ると思つて居る、それで何うしても私の考では、家庭から直ぐ來た者は成べく出來るだけ個人的に、手數は掛るけれども、團體ならば小さい團體を作つてやつて、創造生産建設等の力を遊戯的に養ふのが順序だらうと思ふ、それからもう一方は卽ち團體的取扱でありますが、是れは先刻申上げる通り、成べく家庭から來た直ぐの者でなしに、幾らか幼稚園の生活に馴れた者、年の多い者、さう云ふ方面の者には社會的、團體的遊戯をやらせ

る、殊に國民性の一般の同情とか、お互ひ共同して力を協せて事をすると云ふやうな風に、殊に建設の方面に於ては日本人として餘程互ひに同情を以てやることが必要であらうと思ふ、自分の作つた物は無論、人の作つた物に同情を以て、互ひに力を協せて建設して行く、斯う云ふ協同心、同情と云ふものが最も必要であらうと思ふ、さう云ふ精神を作る爲めに、社會的團體的のことをやる、遊戯に於ても、恩物に於ても、手技に於ても一緒にやらせる、個人的の方面ではバラ〳〵にやらせるけれども、社會的方面に於ては一緒にやらせる、斯る意味に於て一方には個人的取扱により子供の個性が伸び、他方には社會的團體的取扱によりて、子供の社會的協同心、一般社會精神と云ふものが發達して來るのである。

それからもう一ッ具體的の案としましては、幼稚園は教育でなくて保育でである、保育である以上は、是れは卽ち體育に重きを置くのに決まつて居る、斯う思ふ、そこで個人的取扱の方に於きましても、社會的團體的取扱の場合に於きましても、體育には全力を注ぐと云ふことが、保育の大眼目ではなからうかと思ふ、お互ひ父兄の眼から見ましても、幼稚園へ子供をやつて置くと云ふ父兄は恐らく子供の健康に就て一番心配するだらうと思ふ、智識に就ては、是れは小學校に這入れば、もう子供は澤山に詰め込まれる、又其他の精神に於ても小學校に入れば段々伸びて來る、幼稚園の方では智識を教へて貰ふことや、其他一般の六ケしい精神を作つて貰ふことは要らない、先づ幼稚園では身體を造つて貰つて、そうして總ての物の暗示ですナ、所謂芽が出來れば宜いと思ふ、無論時々時事問題、例へば此度の戰爭とか或は其他のことに就きまして、多少實際上の智識を與へてやることも必要であると思ひまするが、一般に系統的に智識を授ける所ではない、將來智識を發達せしめる原、卽ち暗示を與へる所である、例へば球を

轉がすと云ふことを子供がやつて居る、球と云ふものは轉ぶものである、興味を以て球の活動を見て居る、而も球を轉がすには自分の力を働かすのである、そこで自分の力が要る、さうして段々面白く樂しんで居る間に球の圓い形が自然に分つて來る、併しながら圓い形のものを砂の上にあげて轉ばす場合には余り轉ばない、けれども板の上に置いてやれば能く轉ぶと云ふことが自分の經驗で分つて來る、それが分れば夫れで宜い、若しそれが將來段々其の考が伸びれば、物體の形、運動の法則、物理學の智識が出て來るのである、けれども其の物理學上の智識は敎へない、所謂其の智識の暗示を經驗さするである、さう云ふ譯であつて總ての精神を暗示する所であると思ふ、私はさう考へて居る、又是れはさうでなければ所謂詰込敎育になつてしまふ、保育ぢやない、保育の眼目は體育であると思ふ、卽ち體育に於ては、殊に基本的體育とでも申しますか、指尖とか、末端の運動でなく、大きな筋肉、卽ち軀幹とか或は內臟とか、腕とか脚とか、其の基本運動と云ふものをやる、其の基本のことが十分出來れば、本當に頑健な者が出來て來る、元來此の基本的の運動と、それから一方末端的運動と云ふやつは、無論發達の順序から申しましても基本的の運動は先きに發達する、末端的運動は後から發達する、例へばお互ひ皆赤ン坊時代を經過して居るのでありまするが、子供が生れて少し上向に寢かせられて居る、それから段々自分の手足や身體を動かすのでありまするが初の間は指の末端運動より寧ろ手全體の運動をやるそれから足の指より足全體を動かすと云ふ譯で終ひには段々發達して來て這ひ出して來る、這つて來た場合に於きましても、勿論幾らか指の力を使ふ指を使ふけれども、手全體を餘計使ふ、それから足の方でも指を使ふけれども、足全體を餘計使ふ、所謂大きな筋肉を使ふ、段々這ふことから進んで歩んで來る、歩行して來ますと今度は

所謂此の二ッの手が自由になりますから、歩行に伴つて手の末端の指尖の運動が出來て來る譯である。

さう云ふ譯であつて、初めは基本的大きな運動が先きであつて、末端的運動は後からである、さう云ふ順序でありますから、自然の順序から申しましても、基本的運動は先きにしなければならぬ、或は重きを置かなければならぬ、それから末端運動と斯うなるであらうと思ふ、是れは又利かなくなる場合にも基本運動は最後まで殘る、例へば人間が死ぬる場合には、口が利けない末端の運動が出來なくなる、手尖の運動は出來ないけれども、手全體は幾らか出來ると云ふ譯になる、さう云ふ風に死ぬる場合になつても末端運動が先きに死の狀態になると云ふ譯であります、兎に角幼稚園の體育に於ては、基本的運動に最も重きを置く、殊に都會的生活をなす子供には、餘程基本的運動の練習をやらぬと筋骨の逞ましい子供は出來ない、骨組の弱いヒヨロ〳〵した子供が出來て來る、そこで所謂幼稚園に郊外運動の必要が起つて來る、卽ち室的の敎育でなく、本當の園の敎育をすると云ふのが本旨であらうと思ふ、それから又基本練習などに就きましても、例へば駈足などをする場合に於きましても、たゞ好い加減にグル〳〵廻るのでなくして本當に自分の勢力を一杯出して、思ひ切つて徹底をした駈足をする、其のくらゐせねば本當の元氣は出ない、尤も余り無理をし過ぎて子供に怪我をさせては惡い、それは大切な人の子を預かつて居るのであるから怪我をさせては可けないけれども、怪我を十分させまいと一方に考へて居つて、さうして一方十分元氣よくやらせることが必要であります、けれども多少の擦り傷ぐらゐやつても、父兄として小言を云つてはならぬ（笑聲起る）擦り傷などは家に居てもやつて居る、それは責任ある敎師の側から見れば子供に怪我させてはならないけれども、父兄の方からは、私の子供をお願

ひ申し置きます、どうかして十分活潑に、少し位擦り傷などをしても構ひませぬから十分保育して下さいと云うて賴むのが本當だらうと思ふ若し幼稚園の父兄會でもありましたならば、さう云ふ注文をしたいと思ふ、其くらゐにしなければ人間の本當の筋骨は出來ない、從つて幼稚園に於きましても木登りなどをやらして宜からうと思ふ、勿論怪我をさせぬやうに、四尺か五尺の高い木を立てゝ、其下に砂を布いて、勝手に其の木に登らせる、殊に都會の方では運動場が狹くて、幅の方は利用が出來ないから、高さの方を利用する、余り細かな窮窟な遊戯でなしに、寧ろさう云ふ意味の、基本的筋肉を養ふと云ふ意味の遊戯の御工夫を願ひたいと思ふ、併し勿論たゞ一方の筋肉の基本的方面だけの遊戯ばかりでも困るのでありますが、矢張り一方には人間として始終細かな方面、一種の末端的運動は必要である、一方より考ふれば末端的運動の技術、或は其の方の細かな運動、それが必要であるからこそ基本運動をやる譯である、字を書くのでも手尖ばかりでは書けない、矢張り腕などの全體の大な筋肉の運動が必要である、たゞ指尖ばかりでは本當の字は書けない、さう云ふ譯であるから指尖の細かな運動をするには、矢張り基本運動が必要であると同時に指尖の細かな運動も必要でありますから、其方の練習もやらせなければならぬと思ふ、それを又子供は隨分好んで居る、さう云ふことで基本的の運動は大切であり又根本であるけれども、矢張りそれに伴つて細かな運動もやる、けれども其の中間の働が今日では缺けて居りはせぬかと思ふ、基本的極く大きな運動も、細かな運動もあるけれども、其の中間の運動の研究は何うであるかと、斯う私は思うて居る、例へば是れは一ッの例でありますが、紙の上に物を書くと云ふことゝ子供が足の大きな筋肉を働かして駈足をすると云ふことゝは、大變な違ひがある、後者は基本的の運動である、前者は末端的運動である、

此間に大變な違ひがある、其の間の違ひと云ふものを、中間の働きに依つて混ぜて行く、調和して行くことが必要である、例へば卽ち紙の上に書かせることの前に、子供が自由勝手に持つて行くことの出來ると云ふやうな小黑板を與へ、白墨を與へて置く、斯うすれば、紙の上に書かせるよりは、幾らか大きな筋肉を使ふ譯である、是れは一例でありますが、さう云ふ意味の調和を圖る所の道具、さう云ふ風な御工夫が必要ではあるまいかと云ふ考を持つて居るのであります、是れはマア體育の方からも、一方精神の方からも、兩方に關係がございますさう云ふ意味の中間的で運動を工夫して、調和を圖ると云ふことが必要であらうと思ひます。

色々雜駁になりましたが、要するに幼稚園と云ふものは家庭敎育を補ふところの敎育機關で、其の敎育の主義としては遊戯生活主義である、或はそれを細かく云へば、生產的意味を含み、或は建設的意味も含まれて居る、人間生活の實際上の問題としては其の副として、時々斷片的に敎へて行く、併し系統的智識は宜くない、其の智識の所謂暗示を與へて置くのである、其他感情、意志などの方面に於ても、さう云ふ意味に於て相當な暗示を與へ、保育としては只今申し上げる通り、大都會の幼稚園等に於て、餘程基本的方面の體育に一層の研究を積んで下さることが必要ではなからうかと思ふ、斯う云ふ精神であるのであります、尙ほ繰返して申しますれば、先刻子供に少し位の擦り傷位をさせても宜いと云ふ風に云うて言ひ過ぎましたけれども、父兄の方では其くらゐの要求をするのが本當だらうと思ふ、敎師の方では怪我をさせまいと十分に注意して居つてさうして思ふ儘に十分活動させる樣にしたい、是れは念の爲めに申し上げて置きます、要するに、其くらゐの覺悟を以てやつて行くことが必要であらうと思ひます以上は自分の研究であつて、之れを是非やれと云

ふことでありませぬ、研究問題として自分の考へて居ることをお話をし、之れを此次の御感想談の時に御批評を願ひ、又御研究の題目としてお話を申し上げた次第であります、是れで御免を蒙ります。（京阪神聯合保育會雜誌第三十四號所載）

『ピップ』の話（チッケンス）（二）

英文學に現はれたる子供（二十七）

岡田みつ

「昨夜四人が逃げたのだ。それで鐵砲を打つて皆に知らせたンだ。今また一人逃げたッて知らせてゐるンだらう。」とジョーはこんどは聲を出して言つた。

「誰が打ッの？」と僕は訊いた。

姉は裁縫をしながら澁面を作つて、横から口を出した。

「五月蠅奴だ、根掘り葉掘り聞きたがつて。默つて御出な。空言を吐きはしないから。」

僕は姉さんは失敬だと思つた。併し姉さんはお客の前ででもなければ丁寧な仕打はしないのであるから仕方がなかつた。ジョーは、此時に口を大きく明けて、「膨れ」てゐるといふ語を一生懸命に言つてゐるらしかつたので、僕も共に釣り込まれて我知らず姉さんの方へ指して「あの人が」といふ形を口に造つて見せた。ジョーは、其れをてんで取り上げずに、再び口を大きく開いて、力を込めて或る一語を言つて見せたが、僕には何の語とも